W・M・ヴォーリズの思想構造

――「近江ミッション」成立期を中心に――

奥村直彦

一　はじめに
二　ヴォーリズの来日とY・M・C・A思想
　(1)　来日の経緯とY・M・C・A
　(2)　「青年会英語教師」
三　「近江基督教伝道団」綱領の思想
四　ヴォーリズにおける「神の国」思想
　(1)　ヴォーリズの生い立ちとピューリタニズム
　(2)　モダン・ユートピアとしての「神の国」
五　おわりに

一　はじめに

ウィリアム・メレル・ヴォーリズ（William Merrell Vories, 1880―1964, 帰化名・一柳米来留（ひとつやなぎめれる））は、今世紀前半、近江八幡（滋賀県）に本拠を置いて活躍し、全国に名を知られたユニークなキリスト教伝道団「近江ミッショ

ン」（後の近江兄弟社）[1]の創立者として記憶されている。ヴォーリズの推進した福音船「ガリラヤ丸」による湖畔伝道やモダンな結核療養所（サナトリアム）等を含む一連の伝道教化事業は、彼の本領でもあった建築設計監理の他、製薬等の産業部門によって強力に支えられ、自給自立の綜合伝道団「近江ミッション」（Omi Mission）として、特に大正から昭和にかけた一九二〇～三〇年代を中心として全国にその名をはせたのであった。

しかし、それらの活動に比べ、創立者ヴォーリズ自身の思想や信仰については、エピソード的なもの以外にはあまり知られていないし、体系的な研究も十分にはなされていない。[2]近年、建築家としてのヴォーリズが見直されている事実はあるが、建築という分野からのアプローチに留まり、思想にまで深く立入ってはいない。

周知のように、ヴォーリズは実践的な社会事業家であって、単なる冥想的思想家ではなかったが、自分の考えについては、折にふれて著作[3]や講演などを通じて発表し、また詩人として数多くの信仰詩を遺している。さらに自分の生涯については「ひとさまから伝記を書いてもらわないため」[4]に筆をとった『失敗者の自叙伝』があり、これらの中から彼の思想・信仰を汲みとることができる。湯浅八郎氏の言葉を借りれば「世紀のミショナリー、神の愛に魅せられた魂……宣教師であって教育者、建築家であって詩人、宗教家であると同時に事業家、更にアメリカ人であって日本人、日本人であって国際人、国際人であって神の人」[5]であったW・メレル・ヴォーリズは、深い信仰に立ち、天賦の才能を活用して多方面にわたるキリスト教事業を開拓し、実践したのであったが、そこにはそれらを統合し支えていた根元的な思想があった筈である。

この小論は、ヴォーリズの来日の経過とその後の伝道事業の展開形態の分析を通して、それらの裏付けとなる著作や文書を照合しながら、彼の思想構造を明らかにすることを目的としている。しかし八〇余年に及ぶ彼の長い生涯と

その諸事業を網羅することは不可能であり、本稿では特に、「近江ミッション」成立期を中心としたものに限って考察を進めたい。その手がかりとして「Y・M・C・A（基督教青年会）運動」「近江基督教伝道団綱領」、そして「神の国」思想の三つをとりあげ、さらに、思想形成の根元的要素として彼の「家系と生育環境」についても若干触れるつもりである。

ただ方法論的な問題として、左の二点に留意したい。一つは、思想解明にあたって本稿は、近代的な「社会的思惟」の特徴に則しつつもなお「存在の根元としての窮極的なるもの」[6]の存在を受容する立場に立っているということである。換言すれば、人間には近代諸科学の方法によっては分析不可能な領域があり、しかもその人間が「窮極的なるもの」との関りにおいて内面の本質的変革と方向づけを経験し[7]、それが社会現象的に表出する事実があることを容認する、という意味である。

今一つは、資料に基づいた実証的作業を行ないながらも、記述にあたっては、まず仮説的なパースペクティヴを述べ、あとでそれを例証するといった、いわば演繹的な方法をとったことである。なぜなら、多面多岐にわたるヴォーリズの個々の事業の検証から本質に迫る場合「樹を見て森を見ない」危険が予測されるからである。したがって本稿では個々の事象や事業の解明には深く立入らず、特に「信仰と実業」の問題については他日を期することにしたい。

二　ヴォーリズの来日とY・M・C・A思想

(1)　来日の経緯とY・M・C・A

ヴォーリズが滋賀県立商業学校（現・滋賀県立八幡商業高等学校）英語教師として赴任するべくはじめて日本の土を踏

んだのは、一九〇五年（明治三八）一月二九日のことであった。[8] 今その経緯を詳細に述べる余裕はないが、主題との関連において概要を記すことにする。

一九〇二年三月、ヴォーリズがコロラド大学在学中、代員として出席したカナダ、トロントでの第四回海外伝道学生奉仕団世界大会において、中国在住婦人宣教師テイラー夫人（Mrs. F. Howard Taylor）の「キリストの苦しみに与る」〝Fellowship with Christ in Suffering〟と題する講演を聴いているとき、彼は霊的体験を伴う召命を感じ、自ら海外伝道に赴く決意を促されたのであった。[9] この海外伝道学生奉仕団（Student Volunteer Movement for Foreign Mission, 以下S・V・Mと略称する）の運動は、一八八六年七月、ムーディー（Dwight L. Moody）によって開催されたマウントハーモン夏季大会（Mount Hermon Conference）から始まったと言われている。[10] そこには西部へ西部へと向うフロンティア精神の最後の信仰的輝きとも称すべき強烈な海外宣教意識があり、一九世紀アメリカの世界膨張論と関連して「この世代のうちに全世界を福音化しよう」（Evangelization of the World in this Generation）という遠大な理想が脈動していた。[11] その若々しい理想は当時のアメリカ大学生たちのエートスと信仰的パトスに強く訴えるものがあり、海外宣教へ、アジアへと彼らを赴かせる原動力となったのである。このS・V・Mは、モット（John R. Mott）らを中心とする北米Y・M・C・Aを主体として組織運営され、やがて世界各地へと拡がっていった。

ヴォーリズは、大学在学中からY・M・C・Aの運動に参加していたからこそ、代員に選ばれて前記の召命を受けた訳であるが当時のY・M・C・Aの会員は熱烈な伝道意欲に燃え、しかも直接宣教師や牧師になるよりも、教育とかスポーツ、セツルメントなどの働きの中でキリストを証ししようとするところにその特色があった。[12] そして海外宣教に行く者も、実社会へ出る準備や訓練を受けながらその日を待ったのであり、ヴォーリズもトロントから帰って召

命の確かさを自覚した後、決心カードをS・V・M本部に送り、大学の課程を建築科から哲学科に変更して準備に入ったのである。卒業後はコロラドスプリングスY・M・C・A副主事として実地経験を積みながら出発の日を待っていた。

周知のようにY・M・C・A（基督教青年会）は「目的」をもったグループの運動であり、神学や教義よりも、福音の実証としての倫理や生活の向上により深い関心を持つ。[13] その目的とは「青年の生活を正しくし、しかも青年自らの手でそれをなすこと」であり、そのためには精神的状態を改善しなければならず、それは青年をイエス・キリストに導き、またキリストによって導かれることを意味した。やがてそれに知的なもの生活的なものが加えられ、聖書研究会や祈祷会の他に読書会・講演会・出版事業、宿泊などのプログラムが組まれるようになる。[14] したがってその「場」としての「青年会館」が必要となり、さらに全生活の改善という見地から身体の健康が重視され、スポーツやレクリエーションがプログラム化されるようになって、体育館やプール等が建てられていく。

このように見てくると、日本へ来てヴォーリズがまず目ざしたのは、まさしくこのY・M・C・A運動であり、来日二年目にして早くも「八幡基督教青年会館」を建設した理由が肯けるのである。したがって当時のヴォーリズには、Y・M・C・A運動進展のヴィジョンはあっても、キリスト教的理想社会をつくろうとするまでの十分な導きは未だ与えられてはいなかったと考えられる。Y・M・C・Aの目的を示す一八五五年制定の「パリ標準」（Paris Basis）には「『神の国』を青年の間に拡張する」[15]という言葉が見られるが、そこではまだ「恩寵による個人の生活の改革」という、枠組みの内に留まっていると解釈するのが妥当であろう。北米Y・M・C・Aが「キリスト教的人格の成長とキリスト教社会の建設」（傍点筆者）をその目的として掲げたのは、[16] 世界的不況によって各国キリスト者の間に社会

への関心が高まった一九三一年、即ちヴォーリズ来日後四半世紀を経た後のことであった。

ヴォーリズの家系や生い立ちについては、あとで触れることになるが、右に見て来たように青年期における彼の思想形成の第一の手がかりであり、また彼の思想構造の中核をなしていたのは、このY・M・C・A運動とその思想であることは明らかである。

それを裏書するものの第一としては、ヴォーリズが当初の建築家志望から次第に導かれて「伝道事業に生涯を捧げるようになったのは、大学時代に学生Y・M・C・Aに関係したからである」[17]と自ら記していることが挙げられる。さらに大学時代を通じて自活の道を得るために働いたY・M・C・A少年部や夏のキャンプで自分が享受したと同じ恵みを商業学校の生徒たちにも得させたいと願ったから学生Y・M・C・Aを創立したのであると説明し、「このY・M・C・Aは今なお自分の主な関心事である。」とさえ述べている。[18]これが一九五七年（昭和三二）の文章であることを考えればヴォーリズの生涯の思想と信仰の形成にY・M・C・Aがいかに大きな感化を及ぼしていたかを知るのである。

第二に、一九一八年（大正七）三月、「近江基督教伝道団」を法人化して設立した「近江基督教慈善教化財団」（現・財団法人近江兄弟社）の目的として「基督教主義ヲ以テ慈善救済ヲナシ且ツ各人ノ霊性知識身体ノ修養ヲ奨励シ、殊ニ衛生思想ヲ普及スルコト」[19]（傍点筆者）とあり、ここに精神（spirit）・知識（mind）・身体（body）という「三つの原理」に集約されるY・M・C・A思想が表出しているのを見ることができる。「衛生思想の普及」に言及していることも同様に注目される点である。

第三にヴォーリズは、夫人満喜子によって一九二二年（大正一一）に創始された清友園幼稚園を前身とする近江ミ

ッションの教育事業、「近江兄弟社学園」の校歌を作詩しているが、その中の一節に、

"Christ, as our model and our goal,
True health of Body, Mind and Soul" (下線筆者)

とあることからも[20]、それを窺うことができる。

(2) 「青年会英語教師」(Association Teacher)

一方、当時の日本では、国家権力を中心とする教育政策を進める中で、主として官公立学校において外人英語教師を求める動きがあり、米国伝道会社在日宣教師デフォレスト(John H. DeForest)[21]らがその周旋に当っていた。これを聞いた北米Y・M・C・A同盟学生事業担当主事ウィシャード(Lutter D. Wishard)はS・V・Mとの関係でマウントハーモンのムーディーらと相談し、ムーディーは北米Y・M・C・A総主事モース(Richard C. Morse)に日本との交渉を依頼してこの事業を進めた[22]。この時、日本側の条件として次の三点がデフォレストからムーディーを通じてアメリカ側にもたらされた[23]。

(1) 日本語の知識なしに英語教授の機会が与えられる。
(2) 授業以外の時間でも、もし生徒が希望するならば、自由に聖書を教えてよい。
(3) 旅費は支給されないが、それを誰かに立替えて貰えば、支給されるサラリーによって適当な時期にそれを取戻せばよい。

この日本からの要請は、海外宣教熱に燃えていた当時のアメリカエリート青年たちの希望に応えるものであり、

モースの働きの下に、改革派等四つのミッションとY・M・C・Aの協力によって海外教師派遣合同委員会（Foreign Education Committee）が組織されて仕事が進められた。こうして一八八八年（明治二一）二月、その第一号として他の二青年と共に来日したのが、日本各地のY・M・C・Aや学生Y・M・C・Aの組織化、東京基督教青年会館建設等に功労のあったスィフト[24]（John T. Swift）であったことはよく知られている。

ヴォーリズもS・V・Mに登録し、このルートによって来日したのであり[25]、前記三条件についても、当然承知していたものと思われる。彼も①当初日本語は解さず、②授業が終ってから熱心に聖書を教え、③日本への旅費を前借りして来たからである[26]。

これらの教師は「青年会英語教師」（Association Teachers）[27]と呼ばれ、一九〇九年（明治四二）には合計二四名に達していた。彼らの関係する全国のバイブルクラスでの出席者数は一回六〇〇名を下らず、また一九〇六（明治三九）～〇九年（明治四二）の三カ年間に毎年約三五～五〇名の受洗者が出たという数字が[28]、その活動状況を物語っている。これに対しヴォーリズのバイブルクラスには常に五〇名前後の出席者があり、時には七、八〇名から一〇〇名を超える盛況で、受洗者も来日後わずか一年間で一九名に及んだことから見て[29]、同じ青年会教師の間でも彼の働きが抜群であったことが判る。しかも当時の近江がきわめて封建的な仏教的色彩の濃厚な地域であり、算盤を重んじる商業学校におけるバイブルクラスであったことを考えれば、ヴォーリズの伝道活動のこの成果は「奇跡的」とも言えるものであった。彼はこれを以て「聖霊の働き」にすべてを委ねた結果である、と確信し、それが生涯の原点ともなったのであるが、そのことについては後で触れることにする。

このような中で一九〇五年（明治三八）一〇月六日[30]、ヴォーリズの手によって全国で初めての中等学校における学

生Y・M・C・Aが創立されたが、やがて仏教徒を中心とする反対勢力が県議会にまで及び、彼は一九〇七年（明治四〇）三月二〇日を以て滋賀県立商業学校教師を解職されたのである。その直前の二月一〇日には、自ら貯金をはたいて建設した「八幡基督教青年会館」（Herbert Andrews Memorial Y.M.C.A.）の落成式を済ませ、いよいよ本腰を入れて学生Y・M・C・A運動に取り組もうとした矢先の出来事であった。彼の失意と落胆は想像を絶するものであったに違いない。

なおヴォーリズは、このあとに述べるように「近江ミッション」を結成し、盛んな伝道によって県下各地に続々と教会を建てていくが、これらを「基督教会館」[31]と称した。このことにも彼のY・M・C・A的思想の発現を見ることができる。

三　「近江基督教伝道団」綱領の思想

一九〇七年（明治四〇）三月、教師解職にも屈せず近江に留ってY・M・C・A運動を続ける決意を固めたヴォーリズ[32]は、一九一〇年（明治四三）一月、主として同志を募る目的でヨーロッパ経由帰国し、ニューヨークでコーネル大学出身の建築家でS・V・Mの一員でもあったチェーピン（Lester G. Chapin）と会い、カリフォルニアではソーン（Fredrick R. Thorne）を見出して、同年一一月二三日、日本へ戻って来た。[33]一二月二三日には、次第に世に認められつつあった彼の建築設計を業とする「ヴォーリズ合名会社」を設立、その仕事も順調な発展を見る中で、伝道のヴィジョンも拡がり、一九一一年（明治四四）、ヴォーリズ個人のY・M・C・A宣教活動から一歩進めた「近江基督教伝道団」（近江ミッション）が結成された。[34]その間の詳しい事情、成立月日等は明らかではないが、同年一月現在、

このグループの「働き人」(Workers)は、ヴォーリズ、吉田、チェーピン、ソーンの四名、その他に、一九〇九年(明治四二)、馬場(大津)と米原に開設した鉄道Y・M・C・Aの担当者や学生寮寮母等四名を加えた合計八名[35]で、これらから見て、ヴォーリズ合名会社の社員を中心として、伝道団という運動体を組織したものと考えられる。同年四月には同志社宗教主任、総寮長武田猪平牧師をこの伝道団のチャプレンとして迎え、武田は彦根教会牧師を兼ねて同地に在住した。

「近江基督教伝道団」は教会でも教派でもなかったが、一九一六年、その組織の目的や方針を表明する「綱領」(Platform)が制定された。"The Omi Mustard-Seed" 所収の Monthly Report によれば[36]、彼らが長らく伝道活動に従事して来たそれまでの方針を「綱領」の形に宣言(Statement)することになり、全員一致で採択したのだと説明している。だが制定の正確な月日はやはり不明である[37]。この「綱領」は次に述べるように、何度か改訂されてはいるが、基本思想としては不変であり、「近江ミッション」ひいては、「近江兄弟社」の基本方針を示すものとして伝えられている。

左に制定当初の原文を掲げてみよう[38]。(下線及び傍線は後に改訂された部分。表1、2、参照)

PLATFORM OF OMI-MISSION

I —To Preach the Gospel of Christ in the Province of Omi without reference to Denominations, There being no "Omi-Mission Church," converts to be organized into self-supporting congregations of the denomination of their own choice.

II—To practise the complete unifying of the work of Japanese and foreign workers.

III—To evangelize communities unoccupied by any Protestant mission, and under no circumstances to overlap with the work of such missions.

IV—To evangelize Rural communities, as the most conservative element of the Nation, and the most probable source of leadership.

V—To seek, enlist and train leaders and workers.

VI—To work for social reforms, including temperance, social purity, marriage customs, physical and sanitary betterment, and definite efforts for the poor and the "out-castes."

VII—To study and experiment with new methods of evangelization.

近江基督教伝道団綱領[39]

㈠ 本団ハ近江国ニテ教派ニ関係ナク、基督ノ福音ヲ宣伝スルヲ目的トス。

㈡ 本団ニテハ特ニ教会ヲ設立セズ其導ケル基督者ノ団体ガ経済上ノ独立ヲナスニ至ル時ハ其団体ノ選択ニヨル教派ニ属セシム。

㈢ 本団ハ本邦人及外国人団員ノ完全ナル協力ヲ実現スルニ勉ム。

㈣ 本団ハ新教諸派ニヨリ伝道サレザル地方ニ福音ヲ宣伝シ、現在伝道サレツツアル地方ヘハ、如何ナル事情アルモ、新ニ伝道スルガ如キ事ヲナサズ。

(五) 本団ハ主トシテ田舎伝道ニ努力ス。
(六) 本団ニテ福音宣伝者ノ養成ヲ計ル。
(七) 本団ハ禁酒禁烟、貞潔、思想ノ向上、結婚習慣ノ改革、体育衛生ノ進歩ヲ計リ、又貧民及特殊部落ニ対スル適当ナル運動ヲ含ム社会風教ノ改善ヲ計ル。
(八) 本団ハ福音宣伝ニ関スル新方法ヲ研究シ之ヲ実験ス。

では時代と共に、どの部分がどのように改訂されたのか、主な点を列挙してみると文末の別表の如くである。英文のものについては一九三〇年（昭和五）[40]、邦文については一九二五年（大正一四）[41]のものによって比較している。これが一九三〇年（昭和五）版の邦文綱領になると全体を「です」「ます」調の口語体に改めて発表されているが、内容的には変化はない。ところが、戦後のものになると[42]、表2のようにかなり異なった解釈の下に、恣意的とも言える改竄が目立ち、それがいつ頃、誰の手によってどういう意図の下になされたのか、またヴォーリズはそれを承知していたのかという疑問が残るが、今の所、詳細は不明である。ただ全体として見ると、後半になるほど当初の率直で新鮮な精神が失われ、あいまいになっていることは否めない。現代から見れば、初期のものには「貧民」「特殊部落」等誤った不適切な表現が多いのは事実ではあるが、時代的制約もあり、むしろ、その真意を汲むべきであろう。

では、この綱領から、ヴォーリズのどのような思想を汲むべきであろうか。それには、まず制定当時の背景を一瞥する必要がある。この綱領が制定されたと推定される一九一六年（大正五）頃のヴォーリズは、来日後すでに一〇年余りを経過し、在日宣教師たちや既成教派のセクショナリズムとエゴイズムを目のあたりにして、もともと抱懐して

いたY・M・C・A的な超教派思想をさらに強め、それが、第一項のような非教派（undenominational）の宣言となったのであるが、このことは吉田悦蔵が綱領の解説の中で、つぎのように述べていることからも明らかである。

……要するに宗派心は、基督の御心よりして、百害あって一益する所はない。然るに在来因習と惰力が手伝って、思い切って宗派に超越することが出来ず、今に逡巡躊躇して居るが、今日の所謂基督教会の現状である。（中略）我々団員は、ここに目醒めたのみならず、今の宗派に捕はれつつある教界に一警醒を与ふる為に、純粋に基督の道を伝へ、敢て宗派の伝道をせない決心をして此一項を公にしたのである。[43]

また地方小都市・農漁村を国家、あるいは人類生存の根本と考える思想は非常に興味のある所であるが、これにも当時の宣教師たちの大都市集中に対する反発がこめられていると考えられる。それはとも角、ヴォーリズが農山村を愛し、農業に純粋なものを見出していたことは事実で、その根底には、彼が幼少期を過し、自然を愛する詩人的直感を養うもととなったアリゾナの田舎での生活があった。[44] 彼はミッションの事業の一つとして理想的な農場と農村神学校を夢見たがその幻（ビジョン）は後年、ある程度まで実現されている。[45]

つぎに、明治末期においてこのミッションが既に、被差別部落の問題に着目し、その解決に努力する方向を「綱領」にとり入れたことは一定評価されるし、その思想は、一九三五年（昭和一〇）に至って「大林子供の家」[46]その他の施設となって実現された。ここに見られるヴォーリズの兄弟愛と平等主義は、当時の人種差別的な外国ミッションへの反発[47]にも通じ、「主にあって一つとなる」[48]というY・M・C・Aの国際協調精神とも共通するものであった。事実「近江ミッション」では欧米人・東洋人の区別なく平等の立場で働くことができたし、特に朝鮮人を正しく位置づけていたことは、当時の政治社会状勢から見て評価されてよい。この国際協調主義は、後に近江兄弟社学園の教育目

標の一つにとり入れられ、「愛と信念をもった知性豊かな国際人の教育」として、今日に実践されている。[49]

さらに衛生思想や「社会風教ノ改善」においては、彼のピューリタン的合理主義[50]とY・M・C・A的な生活改善思想が表出しており、絶えず「研究」し「実験」して進歩していこうとする姿勢にはフロンティアの時代精神が感じ取れる。

これらの思想や精神は、ヴォーリズにおいて近江の地に「神の国」の思想を実現しようというヴィジョンに統合され、具体化されて「近江ミッション」の思想を形成していくことになる。逆に言えば、わたしたちはこの「綱領」の中にヴォーリズのキリスト教思想の断片的原像（Urbild）を見出すのである。ただ内炭政三氏も指摘するように、[51] 綱領は「近江ミッション」の目標や性格を表してはいるが、団体の組織原理としては不十分であり、根本精神がすべて盛られていると言い難いのは事実である。その意味で、当時の「近江ミッション」の性格とヴォーリズの思想の本質を最も簡潔によく表明しているのは、"The Omi Mustard Seed" に掲げられた左の一文であろう。[52]

Our Omi Mission is affiliated with the National Union of the Y.M.C.A, but is financially independent. It is an undenominational Christian work, Planted by the Providence of God in this otherwise neglected Province, as the above facts indicate.[53]

四　ヴォーリズにおける「神の国」思想

(1)　ヴォーリズの生い立ちとピューリタニズム

これまでヴォーリズの思想構造解明の手がかりとして、Y・M・C・A運動とその思想、近江ミッション綱領の思想を検証して来たが、ここでは彼が天与のヴィジョンとして抱懐し、その実現に生涯を捧げた「神の国」思想について考察してみたい。しかしその前に、ヴォーリズの思想構造の根底にある人格、その形成の基盤である遺伝的素質と生育環境についても当然触れておかなければならない。[54] わたしたちは、以下に述べるように、そこにピューリタニズムの信仰と伝統が色濃く流れているのを見るし、芸術的な香りと実際的な合理的精神が横溢しているのを知るのである。

『失敗者の自叙伝』によれば、ヴォーリズの先祖には、フランス、オランダ、イギリスの血がまじっているという。[55] 父方はオランダ、母方はイギリス、そして双方共通の源流がフランスであると説明されているが、父方のヴァン・ヴォーリーズ家（Van Voorhees）は一六六〇年アメリカに移住し、代々国会議員、州知事、裁判官、牧師等を輩出した名門であり、オランダ改革派（Dutch Reformed）の新教徒であった。その父方の祖父ヘンリー（Henry M. Vories）はミズーリ州判事で田園生活を愛した人物であったという。

母方のメレル家（Merrell）はイギリスからニューイングランドに渡った清教徒（ピューリタン）であり、代々農業を主とし、牧師になった者もいた。母方の祖父ウィリアム（William Merrell）は長老派（Presbyterian）の信仰を持ち、東部コネティカット州からオハイオ州を経てカンザス州に移り、レヴンワース（Leavenworth）の長老派教会副牧師となったが、ヴォー

リズもこの町で生れ、その教会で幼児洗礼を受けている。

父親ジョン・ヴォーリズ (John Vories) は二〇歳で実業に就き、衣料店を経営したが、前記教会に奉仕し、そこで知り合ったジュリア・メレル (Julia Merrell) と結婚した。[56] 一八八七年、一家は病弱な長男メレルの健康のため、アリゾナ州フラグスタッフ (Flagstaff) に転居し、さらに一八九六年には、メレルと弟ジョン (Jonn Vories Jr.) の教育のことを配慮してコロラド州デンバー (Denver) へ移っている。

このように商売や財産よりも子供の健康や教育に心を用い、また教会に熱心に仕える両親の下に生育したことは、ヴォーリズにとって幼少期に深い宗教的感化を受けたことを意味する。また前記のような両親の祖先の信仰的系譜を考えれば、彼もまたその生育環境の中でカルヴァン以来の厳格な「ピューリタン」的信仰と伝統とを受け継ぎ、神の主権と支配、聖書の権威を重んじる信仰的エートスを自然に身につけて生育したことが推察される。幼年の頃、教会の講壇の上に書かれてあった、"The Lord is in His holy temple" という聖言を毎聖日見上げるうちにすっかり覚えたというエピソードは、[57] その一端を示すものであろう。母ジュリアが若い日に聖書学校に学び、海外宣教を夢見たということも、ヴォーリズの成人後の召命に対する応答の決意と無縁ではない。少年ヴォーリズは音楽と絵の才能に恵まれ、特にフラグスタックの自然を愛して詩的天分を養った。[58] また何でも創意工夫して物を造り出し、様々なアルバイトを経験して世の中の仕組みを学んだ。これらはすべて彼の人格形成に深い影響を与え、[59] その思想構造に組み込まれていったのである。

では右に述べたピューリタン的伝統は、どんな形でヴォーリズの生活に表出していたのであろうか。一例を挙げてみよう。

一九〇六年（明治三九）三月、最初の教え子たちが卒業すると、彼らと連絡を取り続けるために、彼は“Monthly Letter”を発行し始めた。これは一九一二年（明治四五）、『湖畔の声』発行と共にその中に含まれて続けられたが、その中に当時、日本の多くの青年たちをむしばんでいた肺結核について、こまごまとして予防法を紹介して警告している一文がある。

……ところで私が諸君に申したいのは肺結核の予防についてである。（中略）日本でこの病気が怖しい拡がり方をしている主な理由は、おそらく寝室を密閉してねる習慣によるのだと思う。その結果、人々は新鮮な大気に触れずに眠ることになる。（中略）夜間の新鮮な空気の他にもいくつかの注意が必要だ。そのいくつかを挙げると――深呼吸の練習（必ず鼻で）、滋養のある食物をよく咀嚼して取る。八時間睡眠（特に学生や頭脳労働者）、結核患者のいた居室に完全な消毒なしには住まない、公衆用コップを使わない、酒や煙草をのまない（病気に対する抵抗力を弱める）。[60]（以下略）（拙訳による）

これらは信仰とは無関係な現代の常識であるとも言えようが、明治の頃にこれだけの熱意と科学的具体性をもって教え子の健康を気づかい、しかも卒業生にまでそれを訴えた日本人教師は果して何人いたことであろうか。[61] ヴォーリズにとってこのアピールは身体を「神の宮」[62]と考え、神からの預りものとする聖書の信仰に基いていた。そこには「神の支配」に従い「神の道具」となるピューリタン的思想があり、そこから合理的生活への方向性が与えられ、禁酒禁煙、克己節制、貞潔などのエートスが生れてくる。

一方Y・M・C・Aの倫理生活の向上や全人教育の思想からも、身体の健康のために保健衛生に留意し、生活を改善して禁酒禁煙・節制・貞潔などの倫理的要請が生じてくる。したがってヴォーリズにとっては、これらのことは自然であり、合理的であると共に当然のことであったから、生涯それを人々にも説いてやまなかったのであろう。先に

引用したヴォーリズの肺結核絶滅への情熱は、一九一八年（大正七）に至って理想的なサナトリアム「近江療養院」（現・ヴォーリズ記念病院）として結実する。

(2) モダン・ユートピアとしての「神の国」

ではヴォーリズにおける「神の国」とはいかなるものであったのか。本稿では「神の国」を一種の地上的な理想郷（Utopia）の思想と仮定して、社会思想史的なアプローチを試みたいと思う。

神学の立場からすれば、一般に「神の国」（Kingdom of God）というとき、旧約時代の神政政治的概念は別として新約のイエス・キリストによる「神の支配」にせよ、終末論的な支配にせよ、いずれにしても信仰の問題であって、単なる思想とは言い難い。だが本稿の方法が地上的な社会現象としての「近江ミッション」の諸事業を対象とし、その中にヴォーリズの思想構造を探ろうとするものである以上、上記のような社会的想定（assumption）を試みることは適当であろうと考えられる。

ところで一般に、人がユートピアを思想するとき、そこには必ず現実社会への何らかの批判が前提とされるが、その批判の処理に当って、そこから逃避するもの[63]と、逆により良い「生」を求めていくものと二つの類型が見られるのが普通である。後者の場合、「生」を求める、そのエネルギーは、現実社会の壁を「向う側」[64]から打ち破ろうとする動きとなって発現する。これは実存的であり、終末的でさえある動きである。もともとトーマス・モア（Thomas More）にせよ[65]、ロバート・オーウェン（Robert Owen）にせよ、当時の社会への批判から出発し、それの改革への心的エネル

ギーから発した著作であり、実践であったと理解される。ただこれらを「ユートピア＝空想」（Utopia）的と規定されたために、[66]後世に「ユートピア」思想に対する甚だしい誤解と偏見が生じたのである。

ヴォーリズは自己の理想社会建設の「実験的」試みを「一種のキリスト教的共同社会――近代的ユートピア」（a sort of Christian Community――a modern Utopia）[67]であると定義し、単なる神学上の「神の国」ではないことを自ら明らかにしているが、これは彼の「神の国」思想を解明する上できわめて重要な手がかりを与えてくれる言葉である。彼は続けて、このユートピアは、それとは異なったシステムによる現実社会のただ中にあるのだから（ユートピアの建設には）熱意や才能と共に寛容と忍耐が必要だと指摘し「なぜならわれわれはここに一種のユートピアを形成しているが、それは決して超越的なコロニーや修道院的な隠遁ではなく、現代のこの世に生きて働くキリスト教経済原理の実際的なデモンストレーション（a practical demonstration of Christian economics working in the world of today）なのだからである。[68]」と言い切っている。

社会思想史の立場からすれば、通常、キリスト教の描くユートピアは、それ自体の内包する社会改善思想がキリスト教の説く「神の恩寵による」という考え方と憧着を起して次第に非宗教、あるいは世俗化し、キリスト教会の側から異端視される傾向にあると考えられる。[69]だがヴォーリズの描いたユートピアは「この世」との緊張関係を認めながらも、最初から「神の恩寵」にすべてを委ねて、その導き（divine guidance）を「祈りつつ、前進」[70]するといった、いわば「神中心」のユートピアを目ざしたのであって、その意味では先に述べたような憧着は第一義的には起り得なかったと言ってよい。ところが戦後二〇年もたってから、果してキリスト教会の側から批判がなされ、キリスト教ユートピア思想は教会側から異端視されるというジンクスを立証することとなった。一九六六年（昭和四一）の「日本

キリスト教団滋賀地区伝道白書」は、ヴォーリズと「近江基督教伝道団（ミッション）」（近江兄弟社）の歴史的な伝道活動の成果を充分評価しながらも、先にも触れた「本団教会（Omi Mission Church）ハ設立セズ」という「綱領」の真意を曲解し、「キリスト教伝道が必然的に教会形成をともなうものであるという事情を故意に回避し、似て非なるキリスト教集団を作り上げ」[71]という表現を以てこの「ミッション」のユートピアを異端と決めつけたのである。吉田悦蔵が綱領の解説の中で「無宗派主義に対すると、常に一種の頑固執拗な眼を以て、非基督的感情を培養しつつあるも、其起因は矢張り宗派心から来って居るのである。」[72]と喝破した六〇年の昔から事態は少しも進歩していないと言う他はない。吉田は「近江ミッションの基督教宣伝に就いて」[73]という一文の中で「近江ミッションは……キリスト教の神学や、教理を伝へるのではありません。目的はただの所謂、キリスト教ではなくキリストです。」と述べているが「わたしたちは十字架につけられたキリストを宣べ伝える」[74]と言い切ったパウロの言葉を想起させるものがある。ヴォーリズらは、自らの伝道の「収獲物」である回心者集団（converts）を自己のものとせず、各自の選択する教会に属するよう薦めたのであり、教会を否定するどころか、自らは最も忠実な教会員として教会に奉仕し、社員たちにもそれをきびしく求めたという事実[75]が物語るものは何であるのか、「教会側」は遂に理解できなかったのである。

結局、ヴォーリズの「神の国」とは何であったのか。言うまでもなく「神の国」とは、聖書に示されたように「神の支配したもう場所」であって「現在すでに地上に存在する」と共に、終末的な「永生究境の場」としての未だ来っていない存在である、という二面性を持つ[76]。ヴォーリズは、現世の生活において「天父への信頼と兄弟愛」の二大原則[77]を重んじ、むしろ地上にその理想を実現しようと願ったのであり[78]、その「ハイエロファニー」[79]（hierophany）としてミッションの諸事業が形成されていったと見ることができる。彼が demonstration という概念を好んで用いたこと

は、これによって理解されよう。ヴォーリズは、このユートピアは「神の国」の小模型であって普遍的性格を持ち、近江で成功するならば、全国で、いな世界でも実践できるものだと確信していた。[80] したがって全世界の社会制度がいつかはこの方針の下に変じて、理想社会となる途の先端に立ち、開拓運動をしたい、と望んでいたのである。これから判断すれば、彼は当時の日本の資本主義体制を改善しようとする政治的思想も手だても持っていなかったことは明らかで、ただ「神の国」の小模型の中でキリスト教的社会主義[81]の実験を試み、その普遍性を信じていたに過ぎないと言えよう。いな、このユートピアの生き方に普遍性があっても、それを普遍化する方策を持たなかった所にヴォーリズの社会思想としての限界があった、と言うべきかも知れない。

詩人であったヴォーリズは、自らの「神の国」思想をつぎのような美しい詩に歌いあげた。[82]

"The Commonwealth of God our aim,
The Brotherhood of man our creed,——
Let us neglected fields reclaim
And sow the heavenly Mustard Seed."

五　おわりに

以上見て来た所によって、ヴォーリズの思想構造を結論的に描くとすれば、以下のようになると考えられる。すなわち、彼が祖先から伝承し、自身その中に生育したカルヴァンの流れを汲むピューリタンの信仰と伝統が土台となり、その上に彼が青年時代に生涯の方向づけを与えられて活動したY・M・C・A運動とその思想が構築され、さら

にそれを支えるものとしてアメリカの時代精神としてのフロンティアスピリットがあった、という図式である。だがピューリタン思想と言っても、どのような類型のものであったのか、またこの構造図式を一つに統合するものが何かあったのか、それらの疑問について今一歩立入った解明を試みながらまとめを急ぎたい。

周知の通り、ピューリタニズムの特徴の一つとして例えば「禁欲」が挙げられる。[83] ヴォーリズの場合、禁欲的で聖潔な生活を信仰の標識として、厳格で合理的な生活を自主的に保とうとした点では典型的なカルヴァン流ピューリタンであったとも言えるが、マックス・ヴェーバー (Max Weber) が指摘したような意味での、[84] 神の撰びや救いの確証を得るためのものではなかったと思われる。ヴォーリズ個人は、常に聖霊の直接の働きを強調し、それを待望して祈り、その導きに自己を委ねる信仰態度をとり続けたことからして、彼の中には、カルヴァン流ではあってもむしろカルヴァン主義ではないピューリタン、例えば「スピリチュアリステン」の如き受動性[85]さえ見出される。しかしその反面原始教会的生活を目ざし、「神の国」の建設を志向した点では、ある種の「再洗礼派」の如き純粋性と、[86] イギリスピューリタニズムの伝統を強く感じさせる。[87] このように異ったいくつかの類型にまたがった要素を内包しているところに、ヴォーリズの思想類型を一概に規定し難い理由がある。要するにヴォーリズ個人は、わずかでも前者的な神秘的要素を含んではいたが、「神の国」の理想社会(ユートピア)を地上につくろうとした彼の伝道活動全体については、後者的ないわばトレルチ (Ernst Troeltsch) のいうゼクテ類型の集団を形成した、北米的プロテスタントの伝統を継承したものと言えよう。[88]

一方、Y・M・C・A思想においても、ピューリタニズムとの共通項として「合理主義」「神の国」思想を受け継ぎ、それを実生活に生かしたのであって、前にも触れた禁酒・禁煙八時間睡眠・聖日厳守などのエートスは、その例[89]

である。これは、時間・身体・財産等、生活すべてを神からの預托と考える「神の執事」の思想[90]に通じ、結局、神の主権と支配を信奉するピューリタン思想に帰一する。

最後に、以上のようなヴォーリズの思想構造に生命あらしめ、これを統合していたのは、彼の変らざる「聖霊の導き」への信頼であったということを指摘しておきたい。S・V・Mでの召命体験、来日後の奇蹟的な伝道の進展を、彼はすべて「聖霊の働き」に帰し、さらに「神の国」の共同体においても、それを祈り、人間の営為である「組織化」を嫌って、つぎのように述べている。「精巧なる制度信条、権威、階級、及び伝道事業における専門家根性を警戒しなければならない。これらは聖霊の働きを失わしめ易いのである[91]」（傍点筆者）。彼の理想は原始キリスト教会のように、聖霊に導かれて兄弟愛を実践する共同体であって、その凋落原因は聖霊の欠乏にあったと考えていた[92]から、人為的なものを排そうとしたのである。しかし、そこには団体が地上的に発展するほど深まって来る矛盾が内在しており、ここに共同体そのものを宗教的媒体とする「予言者的」キリスト教[93]の限界があると言えよう。

とまれ、「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらの物はすべて添えて与えられるであろう。[94]」という聖書の約束を本気で信じ、またその通り与えられた[95]ところにヴォーリズの信仰と思想との接点と生活の原点があり、その事実を共同体の生活そのもので demonstrate することが自己の使命である、との確信が彼を動かしてやまなかったのである。

注

(1) 一九一一年（明治四四）「近江基督教伝道団」が結成され、それが発展していく中で周囲から「近江ミッション」と呼ばれるようになって、伝道団自身もその名称を用いるようになった。しかしミッションという名の持つイメージや性格内容とは異なる自給自立の団体であるとの自覚から、一九三四年（昭和九）二月二日の創立記念日を機として「近江兄弟社」（Omi Brotherhood）と改名した。『湖畔の声』（一九三四年二月号）八―九ページ。

(2) ヴォーリズの思想的系譜を扱ったものとしては、浜田清夫「W・M・ヴォーリズとS・V・Mトロント大会」（『同志社アメリカ研究』第一二号、同志社大学アメリカ研究所、一九七六年）がある。

また生涯全般にわたる概論的なものとして、内炭政三「一柳米来留（W・M・ヴォーリス）の一生」（『湖畔の声』第七一八号―現在、一九七六年～、近江兄弟社湖声社）がある。

(3) まとまった著作としてはつぎのものがある。

A Mnstard-Seed in Japan (1911), *The Evangelization of Rural Japan* (1915),『吾家の設計』（一九二四）『吾家の設備』（一九二五）、*Goro Takagi-Musician* (1933),『若き音楽家の一生』（高橋虔訳）、『一粒の信仰』（一九三〇）（吉田悦蔵訳）, *W. M. Vories & Company Architects* (1937), *The Omi Brotherhood in Nippon* (1940), *Poems of the East and West* (1960),『失敗者の自叙伝』（中村襪訳）（一九七〇年）。

(4) 一柳米来留『失敗者の自叙伝』（近江兄弟社湖声社、一九七〇年、一九八〇年再刊）八ページ。

(5) 湯浅八郎「式辞」（一九六四年五月一六日、近江八幡市民・近江兄弟社合同葬）（『湖畔の声』第五八号、一九六四年）一八ページ。

(6) 嶋田啓一郎『福音と社会』（日本基督教団出版局、一九七一年）一〇ページ。

(7) 同書、一二ページ。

(8) 一柳米来留『失敗者の自叙伝』（前出）八九ページ。

(9) 同書、六八―七三ページ。この大会については浜田清夫前掲論文七八―八〇ページに詳しい。また拙稿「W・M・ヴォーリズ研究ノート(2)」（『湖畔の声』第七七二号、一九八一年）二〇ページ。

(10) 浜田、前掲論文、七五ページ。Richad C. Morse, *My Life With Young Men*, Association Press (1918) p.366.

(11) 土肥昭夫『日本プロテスタント・キリスト教史』（新教出版社、一九八〇年）三一―二ページ。

(12) 一柳、前掲書、六六―八ページ。

(13) 木本茂三郎「青年運動の思想」（現代キリスト教講座V『キリスト教と現代思想』修道社、昭和三一年）二一五ページ。

(14) 同書、二一八ページ。

(15) 同書、二二三ページ。また池田鮮「教会とキリスト教諸団体（『現代世界と教会』Ⅲ、日本基督教団出版局、一九七三年）三四七ページ。
(16) 木本、前掲書、二二一ページ。
(17) 『近江八幡Y・M・A六〇年略史』（近江八幡キリスト教青年会、昭和四三年）二ページ。
(18) 同書、二ページ。
(19) 「近江基督教慈善教化財団寄附行為」第一条。
(20) 新約聖書「テサロニケ人への第一の手紙」五・二三には霊（Spirit）、心（Soul）、からだ（Body）、とある。〈*Good News New Testament*, Today's English Version〉
(21) デフォレストは「近江マスタードシード」に寄稿している。J. H. DeForest, Mr. Vories' Work, *Omi Mustard-Seed* Vol.4, No.4, (1910) p.37.
(22) モースは *My Life With Young Men*（前出）でこの間の事情を詳しく説明している。
(23) 奈良常五郎『日本Y・M・C・A史』（日本Y・M・C・A同盟、昭和三四年）三四ページ。Morse, *Op. Cit*, p.367.
(24) 落合則夫『スィフトものがたり』（日本Y・M・C・A同盟史料室、一九七八年）一一―二ページ。
(25) 奈良、前掲書、二〇三ページ。
(26) 一柳、前掲書、①九一ページ。②一一一ページ。③九六、一〇九ページ。
(27) G. Fisher: *The Association English Teacher in Japan, The Christian Movement in Japan.* (1912), p.p.316-28.
(28) 奈良、前掲書、二〇三ページ。
(29) 『近江八幡教会七十五年史』（近江八幡教会、昭和五二年）。二九ページ。また当時ヴォーリズのバイブルクラスの人数が一〇〇人を超えていたことは宮本文治郎のヴォーリスの父親宛の手紙で知ることができる。*The Omi Mustard-Seed.* Vol.8, No.10, (1916) p.230.
(30) 一柳、前掲書、一七〇―二ページ。この設立には当時の京都Y・M・C・A名誉主事フェルプス（G. S. Phelps）が助言、指導を与えた。吉田悦蔵、「近江の兄弟」三八―九ページによれば、その規約は左の如きもので「三つの原理」に基づき、会員個人の誓約的色彩の濃いものであった。

「滋賀県立商業学校基督教青年会憲法」

一、われらは基督教主義により相互の身体、知識霊魂の向上を図る目的を以て本会を組織す。

二、われらは青年間の悪弊、飲酒、喫煙を是正するため、絶対に禁酒禁煙を宣言す。

三、われらは聖書の研究会に毎週出席することを約す。

なお沖野岩三郎『吉田悦蔵傳』（近江兄弟社、昭和一九年）五〇ページ、によれば、学生Y・M・C・Aの結成は一〇月一日であり、六日には講演会が開かれたことになっている。

(31) 例えば堅田基督教会館、今津基督教会館の如くである。
(32) Wm. Merrell Vories, *A Mustard-Seed in Japan*, II ed. p. 39. 以下。
(33) 一柳米来留『失敗者の自叙伝』(前出)二三五—四五ページ。
(34) 近江兄弟社社史編集委員会『近江兄弟社六〇年史』(草稿)第二分冊二〇ページ。
(35) *The Omi Mustard-Seed*, Vol, 4, No. 8,(1911) p.92.
(36) *Ibid* Vol. IX, No. 10, (1916), p. 277.
(37) *Ibid.* Vol. X, No. 1, (1916), p. 29. General Information の欄に掲げられて以来、毎号続けられているので、(36)の記事とあわせて考えると、一九一六年二月頃のことではないかと推定される。
(38) *Ibid.* Vol. IX, No. 10, (1916) p. 277.
(39) 近江兄弟社社史編集委員会、前掲書、二〇ページ。
(40) 近江基督教慈善教化財団理事会『暫定・近江ミッションハンドブック』(一九三〇) 九—一〇頁。
(41) 吉田悦蔵稿『近江ミッションハンドブック草稿』(一九二五) 六ページ。
(42) 『近江兄弟社諸規定』((財)近江兄弟社、(学)近江兄弟社学園、㈱近江兄弟社、昭和三五年一二月一日) 一ページ。
(43) 近江兄弟社社史編集委員会、前掲書、二一ページ。
(44) 一柳、前掲書、一八—九ページ。ヴォーリズは一九四二—三年、東京帝国大学で英詩を講じたが Wordsworth を好んでいたという。
(45) 内炭政三、前掲論文(『湖畔の声』第七六〇号、一九八〇年) 九ページ。
(46) 学園五〇周年記念文集編集委員会『教育のこころみ——近江兄弟社学園五〇年小史』(昭和四七年)一八九ページ。
(47) 近江兄弟社社史編集委員会、前掲書、二二ページ。
(48) 新約聖書「ヨハネによる福音書」一七・二一ページ。
(49) 拙稿「国際人教育と在日朝鮮人生徒の海外渡航問題」(『兄弟社学園評論』第七号、一九七八年) 八ページ以下。
(50) 本稿(四)で詳述する。
(51) 内炭政三、前掲論文(『湖畔の声』第七三二号、一九七七年) 七ページ。
(52) *The Omi Mustard- Seed*, Vol. IV, No. 3.(1910) p.26.
(53) *Ibid.* Historical Note.
(54) 一柳米来留(前出)『失敗者の自叙伝』九ページ以下。拙稿「W・M・ヴォーリズ研究ノート(3)」(『湖畔の声』第七七三号、一九八一年) 一七—九ページ。
(55) 一柳、前掲書、九ページ。
(56) 近江兄弟社社史編集委員会(前出)『近江兄弟社六〇年史』(草稿) 第一分冊、一〇ページ。
(57) 同書、一一ページ。
(58) 一柳、前掲書、一九—二〇ページ。

(59) 同書、一七、二五ページ。
(60) Wm. Merrell Vories, Monthly Letter (『湖畔の声』第三号、一九一二年) 八—九ページ。
(61) 例えば小説ではあるが、田山花袋『田舎教師』(明治四二年) に見られる教師の肺結核に対する無関心や不健康な生活が想起される。これは実在の人物の日記に基いた自然主義文学として、ほぼ当時の実生活を写している。
(62) 新約聖書「コリント人への第一の手紙」三・一六—七。
(63) 藤平真郎「逃避型ユートピアの成立」(『社会思想史研究』第二号、一九七八年) 五二ページ。
(64) 縫田清二「ユートピア成立の基本的性格」(同誌) 四三—五ページ。
(65) 高橋卯三郎「近江ミッションの哲学㉖」(『湖畔の声』第二二六号、一九三一年) 二四—九ページ。高橋はこの中でモアの「ユートピア」と「近江ミッション」の思想との類似性について比較を試みている。
(66) 藤平、前掲論文、五三ページ。フリードリッヒ・エンゲルス『空想より科学へ』(岩波文庫版、一九六六年) 三一ページ以下。
(67) Wm. Merrell Vories, *The Omi Brotherhood in Nippon*, 5th ed, The Omi Bnotherhood Book Department, (1940), p. 101.
(68) *Ibid.*
(69) 縫田、前掲論文四八ページ。
(70) ヴォーリズは一九三三年 (昭和八) の「近江ミッション」標語にこれを掲げた。
(71) 『日本キリスト教団京都教区滋賀地区伝道白書』(一九六六年) 三ページ。
(72) 近江兄弟社社史編集委員会、前掲書第二分冊、二一ページ。
(73) 吉田悦蔵 (前出) 『近江ミッションハンドブック草稿』一九ページ。
(74) 新約聖書「コリント人への第一の手紙」一・二三。
(75) 近江八幡教会創立八〇年記念文集編集委員会『教会の昨日、今日、明日』(日本基督教団近江八幡教会、昭和五六年) 一二二—三ページ。
(76) 大塚節治「永生論」(『教義学講座I』日本基督教団出版局、一九七六年) 四二六—七ページ。
(77) 大塚、同論文四二九ページ。
(78) メレル・ヴォーリズ「兄弟生活の三理想」(『新近江』第六号、一九三四年) 一ページ。
(79) 佐藤敏夫「(キリスト教の非宗教化) 批判」(『講座現代世界と教会I』日本基督教団出版局、一九七〇年) 二〇七ページ。
(80) メレル・ヴォーリズ「近江兄弟社の理想」(『湖畔の声』第二三五号、一九三四年) 五ページ。

(81) 佐藤、前掲論文二一三—四ページ。
(82) Wm. M. Vories, Omi Mission Hymn, 12/25/32.（『湖畔の声』一九三三年）二〇ページ。ここでは Kingdom of God を用いず Commonwealth of God となっているところにリアリティがある。
(83) マックス・ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（岩波文庫版、昭和四三年）下巻七〇ページ。
(84) 同書、九〇ページ。
(85) 佐藤敏夫（前掲）「（キリスト教の非宗教化）批判」二一二ページ。
(86) ヴェーバー、前掲書、一四〇、一五五ページ。佐藤敏夫前掲論文、二一二ページ。
(87) 佐藤敏夫『キリスト教と近代文化』（新教新書、一九六四年）二二—五ページ。
(88) エルンスト・トレルチ「キリスト教社会哲学の諸時代、諸類型」（『トレルチ著作集(7)』ヨルダン社、一九八一年）二二五ページ以下。
(89) 藤代泰三『キリスト教史』（Y・M・C・A同盟出版部、一九七八年）三四一ページ。
(90) 一柳米来留「私の信念」（『新近江』第一三号、一九三五年）二ページ。
浜田清夫（前掲）「W・M・ヴォーリズとS・V・Mトロント大会」六七ページ。
(91) 一柳米来留「近江兄弟社の根本主義」（『近江兄弟社社報』第八号、一九五四年）一ページ。
(92) 一柳、同右。
(93) 佐藤、前掲論文二一六—七ページ。
(94) 新約聖書「マタイによる福音書」六・三三。
(95) 浅谷道三「キリスト者一柳米来留の生涯」（『抵抗権』同志社大学憲法研究所、一九六五年）三四九ページ。

1916年版原文	1930年版
I —To preach…… converts to be……	I To preach のつぎに and to Practise が入る。converts may be
II — ———	II ———
III …… Protestant Mission	III any other mission
IV —— the Nation	IV mankind
V ———	V ———
VI social reforms sanitary betterment "outcastes"	VI social betterment sanitary reforms the neglected

（表1） 英文「綱領」の変遷

一九一一年（明治44）版原文	一九二五年（大正14）版	一九六〇年（昭和35）版
※(一) (二) 特ニ教会ヲ設立セズ (三) ―――― (四) 如何ナル事情アルモ、新ニ伝道スルガ如キ事ヲナサズ (五) 田舎伝道ニ努力ス (六) ―――― (七) 貧民及特殊部落 (八) ―――― ※ 邦語原文は英文と異なり当初第一項が(一)(二)に分れていたので全体で八項目になっていたが、下のように七項目に改められた。	(一) 本団教会ヲ設立セズ (二) ―――― (三) 新ニ重複的伝道ヲナサズ (四) 国家ノ根底タリ、指導者ノ輩出スル地方小都会、農村、漁村ニ福音ヲ宣伝ス (五) ―――― (六) 社会的ニ弱キ同胞 (七) ―――― (八)	(一) 近江兄弟社教会は設立せず、指導と援助によって基督者の団体を育成し経済的独立を促して…… (二) ―――― (三) ―――― (四) ―――― (五) ―――― (六) 社会文化の向上進歩に努力し青少年教育社会風教の改善に努力する。 (七) 伝道の進展と社会の変化に即し……

（表2）邦文「綱領」の変遷